

# 台湾先住民族による創作的文化蘇生の実践について —若者たちの表現行動を中心に（中間報告）

青柳 寛 竹尾 茂樹 浪岡 新太郎

【キーワード：ネオエスニック・モード、民族映え、エスノエピステーメー、文化蘇生、文化混交、再帰的近代化】

## 1. 本研究の概要および主旨

経済のグローバル化に伴う均一な価値の広がりや地域民族に特有の伝統文化と交錯することで編み出されるハイブリッドなライフスタイルについて、これを探る一連の文化研究に新たなアングルを示すべく、本研究では台湾の若手先住民族の間に興っている創作的な文化蘇生活動に着目した民族誌的事例研究を試みる。より具体的には、グローバルなトレンドを巧みに取り込むことで新たな民族ファッションや民芸——名付けて「ネオエスニック・モード」（新興の民族スタイル）——を編み出し、自分たちの伝統文化をトレンドに再編していこうと努める台湾の先住民族<sup>1</sup>に属する当事者の方々に詳しく取材し、ネオエスニック・モードが織り成す環境ないし文化圏の様相とその社会的な意味や機能を明らかにする。

「近代」という時代設定の中で、経済のグローバル化によってもたらされる地域社会の構造転換は「都市化現象」として捉えられ、とりわけ先住民族文化の研究分野においては、これに伴う伝統の喪失やアイデンティティ・クライシスといった観点から探究されてきた。そうした傾向にも後押しされてか、依然「先住民族は地方の野山や海辺で原始的な生活を営む人々」として類型化され続けているきらいがある。その一方で、若い先住民族の多くは近代化の波に乗り、自民族の伝統的な表現をトレンドなスタイルへと転化させ、アイデンティティを失う——または失うことを嘆いたり卑下したりする——ことなく文化を蘇生し、SNSを通じて創作の様子を対世界的に発信させる動きが世界各地で見受けられる。「民族映え」とでも称すべきこうした動きはメディアにこそ数多く取り上げられ「新興のトレンド」として紹介されながらも、未だそうした民族現象の学術的な解釈に踏み込んだ研究は皆無だといっても過言ではない。エスニックブームを文化産業（マーケティング戦略）の観点から探究したコマロフ夫妻が2009年に出版した『Ethnicity, Inc.』が数少ない探究事例の代表格といえよう。未だ和訳版が見当たらないこの学術書において、コマロフ夫妻は民族的価値観や関連する物産をトレンドとしてブランディングしていこうとする近年の動きを前に、文化研究を担う私たちに新たな「民族知」の構築が必要だと説く（Comaroff and Comaroff 2009 : 1）。

本研究では、この「新たなエスノエピステーメー」を可視化させるべく、オミ・バーバ（1994）が提唱する「文化のハイブリディティ」やベックら（1994）の「再帰的近代化」を誘導概念に用い、理論的な枠づけを行いながら、台湾の若手先住民族の面々が都市型のライフスタイルと

伝統的な生活様式を主体的に織り合わせながら創出していく新進の民族表現と、それによって構築される生活環境の様相を記録しつつ、そこに示される民族的な主張とその根拠を吟味していく方向でフィールドワークを展開する。どの民族の若手メンバーたちがどのような伝統文化の再編をなぜ試み、それによってどんな公共空間が編み出され、生活様式がどのように変わっていくのか？そこに伝統文化との摩擦が起こるのであれば、どのような対応がなされているのか？SNSを媒体として世界に向けて発信される斬新な民族表現にはどのような妥当性が構えられ、それは先代の方々にどのように受け止められているのか？こうした問題点に絡んだ現地検証を試みる。

コロナ渦中でもあったため、本研究の予備調査の段階においては特に、先住民族地域への迂闊な入境や、メンバーとの接触を避けてきた。2023年度に入ってようやく現地への渡航も可能になったところで、それまでリモートの体裁で行ってきた若手先住民族当事者との連絡に基づき現地視察を行い、初回となる研究会での打ち合わせを経て2024年度の現地調査の本格化に備えた。

## 2. 共同研究者間の役割分担と活動の手順

本研究プロジェクトの主任を務める青柳寛（学部では「比較文化論」担当）は「文化創作」を自身の主な探究テーマとし、特にグローバル化が著しく進む現代の文化接触域における若者たちの表現行動、およびそれによる生活世界の変革に着目しながら民族誌的事例研究の集積と体系化を目論んできた。そして、これまで手掛けてきた沖縄（琉球）とブラジル（アマゾン地域中心）の若手先住民族を対象とした調査<sup>2</sup>に次ぐ比較民族学的探究として、浪岡新太郎附属研究所所長（2022年当時、政治社会学が専門分野）および竹尾茂樹名誉教授（「比較文化論」前任）より受けた共同研究の呼びかけに応じた。その結果構えられたのが、3年越しで台湾の若手先住民族を対象に進める本研究である。

共同研究者である竹尾茂樹は沖縄、台湾、および海域東南アジアの幅広い地域を対象に、日本による植民統治時代以来の先住民族の歴史的な立場から近年の公民権運動、あるいは文化とアイデンティティの問題に至るまで、研究を続けてきた。本共同研究においてはそうしたスタンスに基づき、青柳が追究する台湾先住民族のネオエスニックなモード演出の歴史的な位置づけを明らかにしていく部分を担当する。特に創作的な表現行動と伝統文化との比較考察による過去と現代の関係性、そして今後の展望に関し、人間学的な見地からの批評を行う。

トランスナショナル・ガバナンスや近代化とアイデンティティ、あるいはこれらに関わる民主的な政治運動について研究を行ってきた浪岡新太郎は、上記の「再帰的近代化」の概念を用いた見解の提示をはじめ、社会学的見地に立った本調査の理論的な裏付けを担当する。

## 3. 活動のスケジュール

本年度はまず、次年度以降に行う本格的なフィールド調査に備えた打ち合わせの後、台湾での足場づくりと、調査チームの編成およびメンバー間の息合わせに力を注いだ。これまで長期に渡って台湾で調査を行ってきた竹尾のバックアップを得ながら、青柳は現地の先住民族関係

者との連絡を試みた。しかし、当初は思うように連絡がとれず、準備は難航した。この間浪岡は、次年度調査結果が出た段階で開催を予定しているシンポジウムへの参加をお願いできそうな社会学系コメンテーターの特定を行った。

ようやく10月に入っていくつかの応答があり、また竹尾と青柳が所属している「台湾原住民族との交流会<sup>3</sup>」のメンバーで、若手の先住民族研究者や活動家と縁を持つメンバーからも厚意的なサポートをいただきつつ、2024年春の初回研究会に向けた段取りを行った。以下はこの流れに沿った活動暦である：

開催日程	内容	参加者	開催形式
2023年7月2日(日) 16:00～17:30	第1回打ち合わせ：息合わせおよび今後の計画	青柳、竹尾、浪岡	Zoom-Meeting
8月10日(木)～18日(金)	現地視察	青柳	
10月16日(水) 13:00～15:00	第2回打ち合わせ：現地での共同活動計画	青柳、ローシン氏、三浦氏	Zoom-Meeting
11月27日(月) 17:00～18:00	第3回打ち合わせ：台湾渡航（合同研究会および現地視察）に関する事前相談	青柳、竹尾	対面
2024年1月27日(土) 11:00～17:30	第1回研究会（前半）	青柳、竹尾、ローシン氏、曾氏、三浦氏	対面
1月28日(日) 11:00～12:30	第1回研究会（後半）	青柳、竹尾、ローシン氏、曾氏	対面
3月17日(日) 11:00～12:00	第4回打ち合わせ：2024年度の活動計画に関して	青柳、竹尾、浪岡、ローシン氏、曾氏	Zoom-Meeting

#### 4. 主な全体活動

##### (1) 現地視察

2024年1月30日、青柳は竹尾と共に台北市南港区に原住民族電視台（原視／Taiwan Indigenous Television／TITV）<sup>4</sup>本部を訪ね、先住民族の文化や教育に関わるケーブルおよび衛星チャンネルのプログラミングを一手に担う放送局の経営方針と放送様式、そしてネオエスニックな創作に対する担当者の見解を伺った。同局はAlian 96.3というラジオ局を兼ねており、テレビ局側の文化マーケティングを担当し、財団法人原住民族文化事業基金の管理役を務めるラヴノーズ副部長（アミ族出身）およびラジオ局の管理を担当するアチヒリョ広報部副部長（タイヤル族出身）と行った会談では、会議室にてラヴノーズ氏がパワーポイントを使ったプレゼンテーション形式で、2005年7月にテレビ局が設立され、2009年9月に先住民族文化財団設立法に沿って基金制度が確立して以来展開されてきた主な活動路線や、文化事業基金（政府の助成と自治体や企業等からの寄付で成立）の予算配分による局のプログラミング体制（ニュースと情報番組、教育番組、そしてエンターテインメントからなる）について、詳しい解説をいただいた。

TITVが発信するプログラムの中には、新進のヒップホップやラップ、ネオフォーク、フュージョン系音楽を手掛ける先住民族アーティスト、あるいは民族ポップスのDJたちにスポット

ライトを当てた歌番組や、民族間の交流を図るバラエティー・ショー、非先住民系の若手案内人が先住民族所縁の土地を訪ねて地元の生活を楽しく学ぶ紀行もの、あるいは若手先住民族系フォークシンガーが奏でるギターの音色に合わせて各民族の子供たちが自分たちの言葉で歌唱したり踊ったりする子供向け番組が含まれており、局では「伝統的・確かな継承」よりもむしろ「個性を活かした楽しい民族文化の学びと理解」、およびそれを可能にする「プログラマー一同による柔軟な対応」が強調されてきたとのことであった。青柳は以前から、渡台ごとにTITVで紹介されるこうした番組を伝統文化のより厳格な保護と継承にこだわった番組と共に視聴させていただいてきたが、温故と知新の双方を上手く仲介するエスノメディアとしてのTITVの他に比類なきプログラミングの充実性に感嘆させられるばかりであった。「知新」に関わる番組では決まって、アーティストたちのネオエスニックな表現——民族的なモチーフをふんだんに取り入れたクールな身形格好や仕草——を、彼ら／彼女らの民族的なプライドとトレンドクリエイターとしての自覚と併せて拝見することができた。

局の上記お2人の担当者たちとの対話の中で、特記されるべきイベントとして挙げたのが2012年に基金の投資によって設立された芸術祭ことPulima Art Festivalで、これは若手クリエイター、キュレーター、プログラマーおよびアーティストたちに企画・構成や演出のインセンティブが託された大々的な先住民族芸術祭であり、関係者はシンクタンクである当代文化実験場/Elug Creative Lab<sup>5</sup>を足場につなぎ合い、様々なイベント企画を行っている。斬新な発想でユニークなパフォーマンス（広義）展開を可能にしたものにはPulima Art Awardが授与される制度も設立時に発足し、毎年多くのエントリーに恵まれつつフェストが大いに盛り上がるということであった。

この年毎の芸術祭（ただし、コロナ渦中の2年間を除く）には毎回標題が示されてきたが、フェストの創造性・斬新性を象徴する事例として2020年に開催された第5回芸術祭時の紹介URL<sup>6</sup>に誘導いただいたので、これを詳しく拝見してみると、この年の「mapalak tnbarah」という標題が、参加した2大民族に由来する言葉ないし概念の複合であることがわかる:「折る」や「壊す」～転じて「折り目をつける」を意味し、「これまで辿って来た道程に折った木の枝などで区切りをつけ、心機一転新たな道を切り開いて進んでいく」ことを示すパイワン語の「mapalak」と、「日の出の光線を受けてライトアップされる場所」～転じて「生誕や再生の地点」を意味するトゥルク語の「tnbarah」を合成することで、この年の芸術祭が「新たなインスピレーションと探究」——即ち「知新」——をアピールしている点が窺える。URLには、この年の芸術祭が「固定的な『伝統』の定義とそれに沿ったキュレーションの域を脱し、斬新で多角的なアプローチを採用しながら、多くの民族の若手キュレーターに権限と責任を委任する」ことが宣言され、ネオエスニックな表現創作が強く推奨されている。ラヴノーズ氏によれば、これがきっかけとなって台湾全土の若手先住民族間に創作的な活動を盛り上げていくムードが伝播し、今巷で見受けられる大多数のネオエスニック商品やマーケットの発展に少なからず影響したであろうとのことであった。

上記の芸術祭とその表彰制度は、映画とドキュメンタリー部門を含む台湾原住民族文化影視節／Taiwan Indigenous Film Festival (MATA TIFF)<sup>7</sup>および台湾原住民族文学獎／Taiwan

Indigenous Literature Awardとセットで原住民族文化事業基金が保障する創作ブランドとして位置付けられていた。今一つ注目すべき点は、これらのフェスティバルが琉球、ハワイをはじめとする海外の先住民族系のフェスティバルと連携しつつあるという点である。ラヴノーズ氏は、今はまだ試みの段階としながらも、将来的には文化の創生事業に共に取り組んでいくためのグローバルな先住民族系メディアネットワークが出来ていくことに期待を寄せておられた。

青柳と竹尾が現場を立ち去るに当たりラヴノーズ氏は、文化創作に取材した学術研究はこれまで見たことも聞いたこともないといいながら、本調査を高く評価してくださった。そして、局の番組や資料のサンプル提供を含み、必要に応じた今後の相談やサポートに対して前向きに応じてくださるとのことであった。いうに及ばず、心より感謝の意を表したい次第である。

## (2) 研究会

2024年1月27・28の両日、台湾の高雄市塩埕区大義街にある先住民族民芸店こと原駁館KHI IDEASの2階会合スペースを貸し切り、2024年度の本格的なフィールドワークに備えた打ち合わせを兼ねた研究会を実施した。この席で青柳は、それまでSNSを通じてネオエスニック・モードについて対話を重ねてきた先住民族系の大学院生で、政治社会学的観点から台湾先住民族の土地政策と環境計画について修士論文研究に取り組んでおられる国立政治大学のローシン氏（タイヤル族出身）、および青柳の学術同志で今年度より高雄をベースに現地エージェントとして本研究をアシスト下さっている曾瀚慧氏、そして台湾への渡航留学を経て先住民族事情にも詳しく、若手当事者を対象とした本研究の人脈作りにも貢献してくださっている三浦七海氏（国際基督教大学学士課程4年生）を交え、青柳と竹尾が司会進行とコメンテーター役をそれぞれ務めた。本研究会の結果的なプログラムは、下記の通りである：

Joint Research Project on the Praxis of Cultural Revitalization among Young Indigenous Peoples of Taiwan :  
Initial Study Session

Kaohsiung, January 27-28, 2024

Coordinator : Hiroshi Aoyagi

Collaborative researchers (MGU) : Shigeki Takeo, Shintaro Namioka

Local agent : Han-Hui York Tseng

Presenters :

Hiroshi Aoyagi (Professor, Meiji Gakuin University, Japan)

Losing Zhongkai Ko (Graduate Researcher, National Chengchi University, Taiwan)

Nanami Miura (Student, International Christian University, Japan)

Han-Hui York Tseng (Affiliated Columnist, Commonwealth Publish Group)

Commentator : Takeo Shigeki (Professor Emeritus, Meiji Gakuin University)

Venue : KHI IDEAS (803, Kaohsiung City, Yancheng District, Dayi St, no. 2-2. Warehouse Dayi, C8-18)

January 27 :

11 : 00 Opening remarks (Hiroshi Aoyagi)

11 : 10 Introducing each other (floor)

11 : 40 The Goal and Direction of Our Research (Hiroshi Aoyagi)

- 12:00 Discussion (floor)
- 12:20 Lunch break
- 14:00 Presentation 1. On Moda Indígena: Neo-Ethnic Self Styling among Young Indigenous Peoples of Brazil and Its Global Implications (Hiroshi Aoyagi)
- 15:00 Comments (Shigeki Takeo)
- 15:30 Open discussion (floor)
- 17:00 Closing remarks for Day 1 (Hiroshi Aoyagi)
- 17:30 Post-Gathering

January 28:

- 11:00 Opening remarks for Day 2 (Hiroshi Aoyagi)
- 11:10 Presentation 2. On the Current Status and Issues Related to Cultural Revitalization of indigenous Peoples: From a Viewpoint of Younger Indigenous Generation (Losing Zhongkai Ko)
- 12:10 Comments (Shigeki Takeo)
- 12:30 Presentation 3. Exploring Taiwanese Indigenous People as a Japanese (Nanami Miura)
- 11:30 Comments (Shigeki Takeo)
- 12:00 Lunch break
- 12:30 Presentation 4. The Praxis of Cultural Revitalization among Young Indigenous Peoples of Taiwan (Han-Hui York Tseng)
- 13:00 Discussions (floor)
- 13:30 Closing Remarks (Hiroshi Aoyagi)

青柳はここで、2018～19年にブラジルのアマゾン地域を中心に若手先住民族の当事者たちを対象に実施した民族映えの事例研究を紹介した。4民族——グアラニ、トゥカノ、カヤポ、ヤワラピティ——の若手メンバーに共通した3つのネオエスニックな自己表現手法として、1) 伝統的装身具とトレンドな洋風ファッションの混交、2) 伝統的民族モチーフの改造、そして3) 場に応じた伝統とトレンド間のコード・スイッチングがあり、こうした自己表現を「白豪世界への隷属」とみなし、欧米による植民地支配の延長現象と捉える年配者との間に対立が存在する点も示した。これに次いでローシン氏が、今日の台湾における先住民族事情との類似性を指摘しつつ、「創発」を標語にオペレートしている全台最大原住民族商品通路品牌 (LiMA)<sup>8</sup>をはじめとして台湾で実践されているネオエスニック・マーケティングの現状を報告し、知的財産権を確保し民族特有のデザイン使用を規制すべく立ち上がった台湾原住民族委員会／Taiwan Council of Indigenous Peoples<sup>9</sup> (国連先住民族委員会のガイドラインに沿って1996年11月に設立) によって2017年に制定された原住民族伝統智慧創作専用権標記／Protection Act for the Traditional Intellectual Creations of Indigenous Peoplesや、その後今に続いている制限や許容の範囲に関する民族内および民族間の収支なき議論と対立——「文化盗用」に関わる課題——について言及した。

これに続き、三浦氏が台湾の先住民族が置かれてきた「被植民者」としての歴史的な立ち位置と、これを現代に継承した政治的なアイデンティフィケーション、そしてそうした集団的自己認識をベースとして取り組んでいる公民権運動と文化蘇生に関わるアクションに言及しつつ、自身の留学先である花蓮市で参加した織物工房での体験を紹介し、そうした工房をはじめとする文化蘇生目的の活動が若者たち向けに開かれ、「的確な伝統性を踏まえた創作」が盛ん

に推奨されている現状について発表した。そして最後に曾氏が、ネオエスニックなトレンドや創作活動、あるいは関連ブランドのメイキングに対する非先住民族のリアクションについて、意識調査に基づく報告を行った。曾氏はこの中で、「ネオエスニック・ブランド」というものが想定される限りにおいて、関連商品の消費行動が文化盗用に関する議論を遙に先走り、今後はモチーフやスタイルの混交も更に急速に進んで民族的な表現や表象が益々多様化していくことは避けられないはずであり、それに対する知的財産の保護政策がどのように展開するのか引き続きフォローしていく立場を表明した。また、発表後の質疑応答の場で曾氏は、自らのブラジルへの留学と現地の先住民族との交流体験に基づき、ブラジルと台湾の違いを指摘：台湾の場合国土が狭く、民族間の交流もブラジルに比べれば遥かに密で、情報や価値観の共有も容易なため、ネオエスニックなスタイルの伝播やマーケットの成立、あるいは創作活動や商品開発に関わる意思疎通や議論もまた比較的容易に行われるだろうと述べた。

総じて本研究会からは、今後の研究活動において取り上げられるべき課題やコンセプトや事象が協力者間で整理され、活動に大きな進展が図られた。また、2日目の席では、2024年度に現地調査を本格化させるに当たって文化盗用の問題に注目しながら聴き取り調査を進めていくべき点や、都市部と地方の先住民族居住区における創作活動の違いや連動性に関する観察の必要性が協議された。

## 5. 個別活動

### (1) 現地視察 [青柳 寛]

2023年8月10～18日の日程で青柳は台湾に赴き、先住民族のネオエスニックな演出とその伝統的な背景を追って台北より高雄に南下した後、屏東、礼納里、台中、南投県を巡りながら予備的な現地視察を行った。

高雄では、貿易港の倉庫群跡地を整備してレトロなウォーターフロントのショッピングエリアへと塗り替えた塩埕区大義街の一角にある先住民族の創作民芸店こと原駁館／KHI IDEASを訪れ、タイヤル系タロコ族出身の店員（40代女性）に店の沿革や経営状況について話を伺った。店にはアミ、サイシャット、サオ、タイヤル、ツォウ、パイワン、ブヌン、ブユマ、ヤミ、そしてルカイを含む10の主要な民族を表象する大小の工芸品が地酒や乾燥食品類と共に店内を彩っていた。必ずしもオリジナルグッズのみならず、典型的な民族像をキャラクター化したマスコット、あるいは民族モチーフをリデザインしたストラップやアクセサリー、タペストリー、ハンカチ、文具、シール、キーホルダーなども多数含まれていた。店員とは「伝統の捉え方」に話が及び、廃れ行く伝統をただ見守っているだけではなく、本店のように更新して対外的にアピールしていくこともまた大切であるという見解が示された。なお、戻ってきた折にはぜひ彼女の地元でも若手の面々に取材し、思いを聴いてみるよう勧めて下さった。

2009年8月に発生した通称「八八水害」（主に土石流）によって元の土地を追われた地域の3つの村落——パイワン系瑪家郷、同族系三地門郷、およびルカイ系霧台郷好茶郷——の住民たちが新たに移住先で相互扶助による共生を目的に構成した礼納里集落では、村の長老の1人で民泊施設を経営するバル氏にお会いし、集落の若手当事者たちによる広報活動について話を

伺った。フェイスブックの専用ホームページ<sup>10</sup>等で集落が運営する民泊とそこで得られる文化体験を対外的にアピールする際、各村の代表が自分たちの文化的な特徴を出し合いながら共に編み出した「融合民族形式」を活用しつつも、アットホームではそれぞれの伝統的な生活様式を維持していることが確認できた。この新興集落の家々には、各々の所属民族を象徴する壁画や装飾がアイデンティティ・マーカーとして施され、ビジター・センターには各民族由来の衣装や生活用具が画像パネルと共に展示されていた。台湾の実業家で、船舶・航空・ショッピングの分野で力を発揮する長栄集団／Evergreen Groupを立ち上げ、東日本大震災の際に日本の被害者への支援として10億円を寄付したことでも知られる張栄発（1927～2016）の基金会が、地域の先住民族文化の持続的発展とそのための子供たちの育成を目的に、台湾政府の教育部および屏東県政府と連携して設立させた「長栄百合同小」も集落内にあり、バル氏によれば若手のアーティストが子供たちと一緒に工芸や現代版民族音楽（民族ポップス）の創作活動を行っているらしいとのことであった。訪問時が週末だったこともあって集落は静まり返り、小学校も閉まっていたため、この点を確認することはできなかった。

台中の原住民族文化センターと彩虹眷村、および南投県の九族文化村では、観光客を相手に文化体験と民族資料館の展示を提供するテーマパークを視察し、伝統保護と創作的演出の双方を取り入れたステージングを見学させていただきながら、関係者から話を伺った。いずれのテーマパークも複数の民族（支流も含む）を紹介する設定になっており、プログラミングや展示に関する協議を行う接触域として機能していた。また、こうしたパークの構成と存続が、そこに外部の各所からやってくる観光客への理解を促すのみならず、自分たちの働く場としても文化の学びや継承の場としても、少なからず機能している点も確認できた。九族文化村で民族舞踊を披露したパイワンの若手ステージパフォーマーたちとのステージ後の雑談からも、伝統的な舞踊に自分たち独自の解釈を加えて演出していくことに参与意識——延いては民族の誇り——を実感している点が一樣に理解されたが、彼ら／彼女らは特に目新しい何かを創作しているというより、むしろ伝統を忠実に再現することに力を注いでいた。

## （2）現地視察など [竹尾茂樹]

2024年1月26日、屏東に旧知の葉燕妮（ルギー・アミ族）さん、依佈恩・魁格那霖牧師（イブン・パイワン族）夫妻を訪問してインタビューを行った。イブンさんは長老派に属する平山教会の主任牧師を務めるが、1950年代に創設されたこの教会は、屏東にある最初の先住民のためのキリスト教会である。先住民の生活圏である各集落から、師範学校など高等教育に就学するために屏東市内に移住する若者たちの心の拠り所として機能してきた。現在でも会衆の8割がパイワン並びにルカイ族であるという。民族固有の祖霊信仰、シャーマニズムが存在するとともに、キリスト教の浸透、あるいはその副次的な影響としての福祉分野などにおけるコミュニティ・サービスは、先住民の社会において今日でも大きな意味をもっている。こうした「原始的な」伝統とハイブリッドな世界宗教との相互的な干渉の実態と意味づけにも関心を払うべきであろう。ルギーさんは、イブンさんと同じく花蓮県にある玉山神学院<sup>11</sup>の卒業生である。彼女は教会音楽学科の専攻を経て、武蔵野音楽大学に留学、修士号を取得している。母校の玉



山神学院でも音楽系の主任を務めたが、近年は屏東市を拠点に、近隣のパイワン族の青少年を対象に、伝統的な民族音楽を取り入れた楽曲を編んで、合唱形式で発表している。小学校では全国コンクールの表彰も受けるほどである。これも伝統文化との新しいハイブリッドの創生の試みと言えるだろう。

2024年1月28日、台北において黄 智慧さんにインタビュー。彼女は中央研究院民族研究所の人類学者である。大阪大学大学院で青木 保さんの指導を受けたこともあり、日本植民地時代から今日にいたる台湾の歴史のなかに、先住民族の文化の変容、あるいは日本文化の残存についてなど多岐にわたる研究を行ってきた。今回は、折しも開催中の「Laububulu 魯凱の宝物——台湾博物館から霧台郷へ百年を超えた里帰り特別展<sup>12</sup>」をいっしょに参観した。この企画は国立台湾博物館と、ルカイの代表的な集落である屏東県霧台郷にあるルカイ文物博物館蔵と、私的コレクションを合計110点持ちより、4年の準備期間を経て実現した。ルカイ・パイワン族は木彫刻や陶器、織物など物質文化の豊かさで知られるが、近代以降の社会の激動のなか、部落から散逸してしまっ、部落の当事者が目にするものがほとんどないものも多々ある。これを本来の出自に戻して展示をし、かつその文化伝承の意味づけを改めて考察しようという試みであった。展示は、ルカイ文物博物館へも全て移送されて行われた。またキュレーターの役割や展示の経過についての記録も公開されている。この過程で従前のキャプションの誤りなども多々訂正された。文化創出と、これを享受ないし消費することの仕組みの一つが博物館であるが、文化とは誰に属するものなのか、博物館が収集することの意味についての深い問いかけを含む催しであると思われた。

2023年12月9日、沖縄県南風原町立文化センターにおいて、映画「アジアはひとつ」上映会を共同開催。竹尾はNGO「台湾原住民族との交流会」代表世話人として参加した。この映画は1969年から1972年にかけて、沖縄の日本復帰前後にNDU（日本ドキュメンタリストユニオン）が制作したドキュメンタリー映像である。当時の沖縄と台湾のタイヤル族の部落社会の断片を切り取るようなものであったが、「台湾原住民族との交流会」は同年10月には舞台となった台湾宜蘭縣の南澳集落で同作品の上映会を行なっている。台湾博物館におけるルカイ族の展示と通底するのは、被写体となった人々や社会に対して、（遅ればせながら）改めて提供を試みるものである。今では歴史の名の下に語られる社会のありようは一体誰に帰属するものなのだろうか。

2024年2月19日、大宮市において寺田和弘監督にインタビュー<sup>13</sup>。歴史が誰に帰属するかという問題に関連して、知己を得たドキュメンタリーの映像作家である。次回作において、70年代に南投県角板山のタイヤル族に嫁した日本女性とその一族を描くという。先住民の社会は、日本による植民地統治を経験し、さらに外省人（国民党とともに戦後渡台した人々）と本省人（主として福建省を中心とした旧移民）の対立（省籍矛盾）に否応なく巻き込まれてきた。寺田監督の描こうというタイヤルの一族には50年代の白色テロリズムに連座して、処刑された医師・知識人のロシン・ワタンが含まれている<sup>14</sup>。二二八事件（1947）やこの白色テロについての解明は、膨大な公文書などをもとに1990年代以降にやっと可能になった。寺田監督の試みは、戦後から現代にわたる日本社会と台湾社会の関係をあらためて問う試みになるのではな

いか<sup>15</sup>。

以上が、23年度に竹尾がこのプロジェクトに関わる関心をもって行なった活動の報告である。振り返れば、台湾先住民族の現在のあり方を規定してきた、歴史との「和解」のプロセスに関心が集中してきているように思われる。歴史や文化の名のもとに周縁化され、主体性の表出が妨げられてきた人たちが、過去との和解の経過の中に、いかに新しい表現の形態を作り出せるかという新しい動きが起きているように思われる。

### (3) 台湾先住民族のアジア島嶼地域における立ち位置の検討 [浪岡新太郎]

浪岡は、特に政治参加に関して台湾に二回出張し、その成果を神戸大学で報告した。一回目の出張では、1月11日から13日まで滞在した。台湾総統選挙をめぐる国民党と民進党の党大会に出席し、選挙公報担当者と面会した。そこで、マイノリティ政策が選挙の争点とされているのか、また、されている場合には具体的にどのようなものかについて質問した。マイノリティ政策は争点にならないわけではないが、主要な争点ではないとの回答を得た。また、国立政治大学では原住民研究センター長と面談し、台湾における先住民政策の展開について概要の説明を受けた。特徴的であったのは、高等教育におけるアフターマティブアクションは、マイノリティ政策に親和的な民進党以前から、国民党によって開始されていた点であった。

二回目の出張では、2月7日から13日まで滞在した。台北のフィリピン、インドネシア人コミュニティ、いくつかの先住民集落を訪問した。確認できたのは、フィリピン、インドネシア人コミュニティは、言語も理由となって、台湾国民とそれほど交流がないこと、先住民は国民党を支持する傾向があることである。

今回の出張で得られた知見は、3月11日に神戸大学法学研究科会議室での「多文化主義と台湾」についての研究会で報告した。さらに、3月29日には神戸大学法学研究科で以下のゲストを迎えて国際シンポジウムを開催する：

王保鍵教授（国立中央大学客家学院）

“The changing Voting Behavior of Hakka Ethnic in Taiwan : The Example of 2024 Presidential and Legislator-at-large”

鄭子真教授（中国文化大学政治学科）

「2024年台湾総統選挙——地縁政治との関係を中心に」

浪岡はここで、コメンテーターとして参加する。

### 〈参照文献〉

竹尾茂樹「台湾原住民は激動の百年をどのように生き抜いてきたのか」菊池一隆『台湾原住民オーラルヒストリー』（図書新聞 2018年2月10日、朝日書林）

Bhabha, Homi (1994), *The Location of Culture*. London: Routledge.

Beck, Ulrich, Giddens, Anthony, and Lash, Scott (1994). *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*. Cambridge: Polity Press.

Comaroff, John, and Comaroff, Jean (2009). *Ethnicity, Inc.* Chicago: University of Chicago Press.

〈注〉

- 1 台湾では「先住民族」は「原住民族」と表記されるが、ここでは台湾側の資料や固有機関の名称に観られる原文を除き、日本式の表記で示すこととする。
- 2 <https://www.redalyc.org/journal/4069/406964062003/406964062003.pdf>
- 3 <https://www.ftip-japan.org/>
- 4 <https://web.pts.org.tw/titv/indigenoustv/>
- 5 [https://clab.org.tw/en/events/elug\\_creative\\_lab/](https://clab.org.tw/en/events/elug_creative_lab/)
- 6 <https://www.pulima.com.tw/PulimaENG/Pulima.aspx>
- 7 <https://www.matatiff.com/>
- 8 <https://www.lima.com.tw/home.jsp>
- 9 <https://www.cip.gov.tw/zh-tw/index.html>
- 10 <https://www.facebook.com/Kucapungane20101225/>
- 11 1947年「台湾聖書学校」として発足、先住民族の高等教育機関として学士の資格を得られる4年制の基督教教育学科、教会音楽学科、教育社会工学科、2年制専修の宗教学科のほか、大学院修士課程に相当する神学研究所を有しており、社会教育活動としても先住民族の伝統文化や社会支援を積極的に展開している。先住民子弟に高等教育への道が開かれていない80年代頃まで、玉山神学院の果たした役割はまことに大きい。  
金子昭 「台湾先住民族と基督教伝道 ―とくにタイヤル族の長老教会について―」『天理大学おやさと研究所年報』（第22号、2016年）
- 12 [https://fihrmaphrm.gov.tw/ja/?g=new\\_unit\\_content&sid=104](https://fihrmaphrm.gov.tw/ja/?g=new_unit_content&sid=104)
- 13 東日本大震災の被災とその後を扱ったドキュメンタリー「『生きる』大川小学校津波裁判を闘った人たち」（2022）が代表作である。
- 14 終戦直前には「高砂族」として初めての総督府評議員に任命されるが、54年に、「高山族共産党スパイ叛乱罪」という名目で台湾省保安司令部により逮捕・投獄され、1954年銃殺刑。
- 15 竹尾茂樹「台湾原住民は激動の百年をどのように生き抜いてきたのか」菊池一隆『台湾原住民オーラルヒストリー』（図書新聞 2018年2月10日、朝日書林） [<https://www.fujisan.co.jp/product/1281687685/b/1624566/>]